

研究のフィールドの概要

研究のフィールドとしては、実際に学校復帰に向けて支援している適応指導教室が適当である。研究者2人が、協力いただいた適応指導教室は、伊勢崎市適応指導教室と桐生市適応指導教室である。

1 伊勢崎市適応指導教室

(1) 主な活動内容

- 個に応じた学習活動
- 体験活動（自然体験活動、社会体験活動、生活体験活動）
- 仲間と楽しむ活動（スポーツ、集団遊び等）
- 相談活動（個別、集団カウンセリング、進路相談、保護者面接相談等）

(2) 一日の生活

時 間	子 ど も の 活 動
9:30～10:00	朝の会（一日の活動計画）
10:00～12:00	トライタイム（個に応じた学習活動）
12:00～13:00	昼食（持参）・休憩
13:00～15:00	フレンドリータイム（スポーツ等体験的活動・個別カウンセリング等）
15:00～15:30	清掃・帰りの会（一日の振り返り）

(3) 特色ある活動

- 「適応指導教室サポートケース会議」の実施・サポートチームによる実践
- 自然体験活動（乗馬体験中心、年間5回）
- 他の適応指導教室との地域ネットワークづくり
- 各学期（3学期）の最終日に開催される「お楽しみ会」

2 桐生市適応指導教室

(1) 主な活動内容

- 一人一人の主体性を培い、様々な活動に興味・関心を喚起させる自主活動
- ありのままの自分を表現しながら、人とかかわる心地よさを味わい、仲間関係を深めるふれあい活動
- 運動の楽しさ、感動体験や野外の自然に触れる心地よさを味わう活動
- 児童生徒の実態に応じて課題を設定し、学習への興味・関心を喚起しながら、学習の習慣化を図る活動
- 児童生徒一人一人の実態を見極めながら、個別カウンセリングを行い、受容と共感に基づく支援のもとに再登校や進路に向けての働きかけをする活動

(2) 一日の主な活動（基本日程）

開級時間 午前9時30分～午後3時30分（木曜日は午後1時30分まで）

時間	月	火	水	木	金	
9:30 ~	自主活動					
10:30	学習	運動・ 登山・ 昼食・ その他	学習	ふれあい活動		
11:00				調 理		
11:30	清 掃			清 掃	屋外活動等	
12:00	昼 食			昼 食		
13:00						
14:30	学習		学習		学習	
15:30	自主活動	自主活動	自主活動		自主活動	

(3) 特色ある活動

- 各学期の始めと終わりのチャレンジ期間
- 宿泊体験学習（10月26・27日）
- 野外活動・屋外活動
- 幼稚園との交流
- 調理実習

フィールドワークの実践 - 「参加観察での見取り」から -

1 伊勢崎市適応指導教室

(1) 日常の適応活動から

通常の一日は、「朝の会」で自分のその日の活動計画を立てて、午前・午後と活動する。午前中は、個別の学習（教科の学習、読書、絵画制作、パソコン等）を行う。午後は、集団生活への適応を目指した、スポーツ、草花・野菜栽培等の体験的活動を中心に行っている。それとともに、自分の得意なもの、好きなものを伸ばすことを目的とする時間をバランスよく配している。活動後は、清掃し、帰りの会で一日の振り返りをして終わるというプログラムを基本とする。

- 適応指導教室のスタッフは、子どものことをよく理解して一人一人にコミュニケーション豊かで丁寧にかかわっている。認めてほめることなど、プラスのふれあいをもてる機会を意図的に取り入れることで、自尊感情を高め自信をつけさせている。そのため子どもは気持ちも安定し、活動のエネルギーを高めている。
- 学習活動では、個別の学習支援や進路支援を充実させることによって、学習の遅れや進路への不安を軽減させることができていると思われる。
- 適応指導教室には、様々な状態の子どもが通室している。集団の中での支援が可能な状態の子どももいれば、別室での個別支援が精一杯の子どももいる。個という視点を重視した、柔軟で、臨機応変ともいえる子どもへの対応が必要である。
- スタッフ会議が、週1回1時間程度開催される。ほとんどが不登校を早期解決できずに、長期化している子どもだけに、段階的に学校復帰を目指す支援プログラムづくりに時間を割くことが多い。夏休み以降は、アセスメントシートや支援シートを活用しながら、【情報収集による実態把握→子ども理解・アセスメント→支援目標・方針の決定→実践に向けての学び・トレーニング→支援の実践→評価・検討】というサイクルを循環的に繰り返しながら、

プログラムをつくり、それに基づいた支援を目指している。

- スタッフ会議では、スタッフの子どもへのかかわり方・役割分担等の検討がなされ、一人一人のスタッフを生かしながら、個々の子どもを一つのチームとしてどのように支援していけばよいか、という視点が明確に見られる。
- スタッフ会議では、実践した支援の結果、子どもがどのように変化したかについて、スタッフがきめ細かく、多くの視点から評価し、次の支援へとつなげていっている。学校につながりそうな子どもが出てきたときに、スタッフが発した「学校は忙しすぎるから、ここで卒業させるのもいいんじゃないかと思っている。」という言葉に、学校の多忙さ・適応指導教室と学校の連携の難しさが見て取れる。
- 適応指導教室のスタッフ間では、会議以外でも常に通室する子どもたちのことが話題になっており、支援にかかわる情報交換が日常的になされている。
- 適応指導教室の中に、教育相談の技能に優れ、教育相談のキャリアも豊かで、他のスタッフの信頼も厚く、コーディネーターとスーパーバイザーの両方の役割・機能を併せ持つ方が配置されている。
- スタッフは子どもの送り迎えの短い間でも、親とコミュニケーションを取ろうと話しかけ、親との関係がつかれるように、いつでも連携ができるように心がけている。学校とも、子どもの現状を電話連絡したり、学校まで適応指導教室での活動の様子を報告しに行ったりして、連携の必要性を強く打ち出している。
- 適応指導教室のスタッフの「適応指導教室に来ると、どんどん元気になるんです。でも、次の一歩が難しいんです。」や「もうあと半年早くあの子に出会えていたら、もっと早く何とかしてやれたかもしれない。」といった言葉から、長期化した子どもの学校復帰に向けたハ・ドルの高さ、学校と適応指導教室の心理的距離の大きさを推し量ることができる。

(2) 自然体験学習から

自然体験学習は、年間5回、4つの活動（乗馬体験活動、自然体験活動、宿泊体験活動、ふれあい活動）から構成されている。

具体的な活動としては、乗馬体験活動を中心としているところに特色がある。事前活動としての飯ごう炊飯（ふれあい活動）、馬事公苑での馬とのふれあい活動・乗馬体験（乗馬体験活動）、赤城地蔵岳登山（自然体験活動）、赤城少年自然の家での宿泊・野外炊飯（宿泊体験活動）、宮城村フラワーパークでのウォークラリー（自然体験活動）、事後活動としての参加者合同のフォトポスターづくり（ふれあい活動）等がプログラムされている。

- スタッフは、子どもの担当を決め、支援チームとしてかかわる。【子どもの実態把握→子どもの理解→子どもの思い、願いを生かした目標の設定→体験活動の実践→活動の振り返りと自己評価・相互評価】を行い、その後の子どもの日常の活動に生かしたり、次回の体験活動に役立てたりして、子どものステップアップを目指している。
- 子どもは、スタッフの支援を受けながら、乗馬という未体験か、体験の少ない活動に対する不安を克服することで、新たなことにチャレンジしようという気持ちや新たな一歩を踏み出そうという気持ちを醸成するきっかけになっている。
- 伊勢崎市適応指導教室の子どもの中には、体験活動後、これをきっかけにして、全く学習することのなかった子どもが教科の学習を始めたり進路に関心を示したりするようになってきた。また、同年代との接触がほとんどないヨコの関係がとれなかった子どもが、同年代の子どもとのコミュニケーションが取れるようになるなど、自然体験活動の回数が進む毎に、変容の目立つ子どもが見られた。

(3) 担任との連絡会（適応指導教室通室生連絡会）から

夏休みを利用して、適応指導教室のスタッフと在籍している学校の担任全員が、適応指導教室に集まって、子どもの情報を交換するために、連絡会が開催された。このような連絡会は学期に一度の予定で、計画されている。

- 適応指導教室のスタッフは、今の子どもの状態とどのような方針の下に、どのように支援しているかを、アセスメントシート等を活用しながら説明した。担任からは、日頃から子どもや親とどのようにかかわっているかについて説明があった。子どもに関する情報が伝達され、情報連携が図られている。
- 学校復帰や自立に向けて、子どもを具体的にどのように支援していくか、それには、お互いにどのような役割分担をしながら連携していく必要があるか、などについて検討する、学校と適応指導教室の協働（行動連携）を目指した話し合いの場がさらに求められる。

(4) 適応指導教室サポートケース会議から

伊勢崎市適応指導教室では、臨床心理士や精神科医など不登校の臨床の専門家をスーパーバイザーとして招き、不登校の子どもについて、学級担任や適応指導教室のスタッフ、保護者など支援にかかわる複数の人たちで、情報を出し合って、アセスメントし、支援案を考える機会を、計画的・系統的につくっている。

今年度は、適応指導教室のスタッフのニーズから、通室している子どもについて、適応指導教室のスタッフだけが参加して、専門家にスーパーバイズしてもらいながら、効果的な支援策について考える機会も設定された。

- 子どもへの支援の基盤になるアセスメントを、多くの情報、多数の目を基に、背景から多面的に行うことができる。
- 専門家からのアセスメントや支援策に関するスーパーバイズは、心の拠り所になるとともに、不登校問題解決のトレーニングの機会にもなる。
- 支援者で検討しながら具体的な支援策が決まり、役割分担ができることによって、チームの一員としてかかわろうとする意識が高まる。

(5) 適応指導教室の行事から

12月には季節の恒例行事「餅つき大会」が、各学期の最終日には「お楽しみ会」が開かれる。特に、「お楽しみ会」は、適応指導教室の子どもがスタッフと一緒に企画し、プログラムをつくるので、実施する子どもが楽しみにしている行事である。

- 子どもとスタッフが一緒に、【通室生のニーズの把握→目標の設定・行事のプログラムの計画→通室生のパフォーマンス毎の練習→当日の実践→活動の振り返り・評価】のように「お楽しみ会」づくりに参加し、次回につながるような円環的なサイクルで実践している。
- 自分たちの好きなこと・得意なこと（人形劇・ギター等）を生かして、通室生の協働の形で練習・発表し、達成感や成功体験を味わうことで、お互いに自尊感情を高め、自信をつけていくことができる。
- 保護者や学校にも参加を呼びかけると、実際に担任が子どもの活動の様子を見に来たり、母親が子どもとスタッフと共に行事に参加したりする場面もあった。行事は、子どもや適応指導教室のスタッフと学校、家庭との関係づくりや学校・家庭・適応指導教室の三者連携の基盤づくりの役割も果たしている。

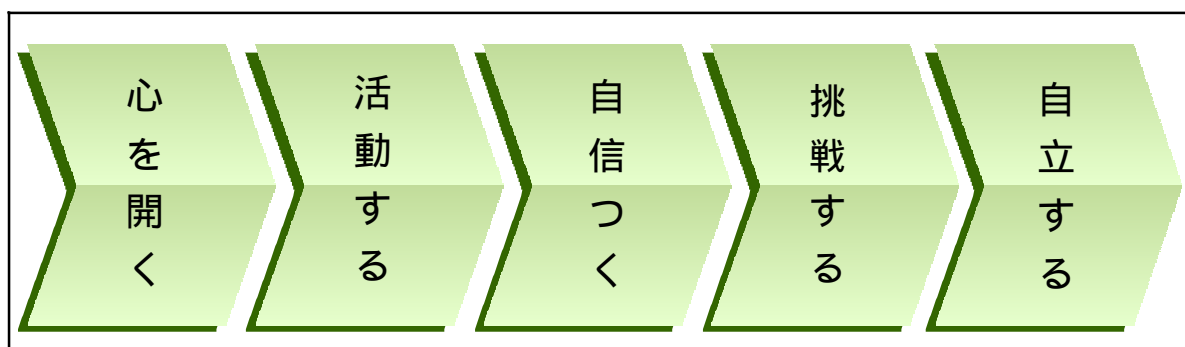
2 桐生市適応指導教室

(1) 日常の活動から

開級日は月曜日から金曜日である。時間は午前 9 時30分～午後 3 時30分（木は午前 9 時30分～午後 1 時30分）である。始まりと終わりの時間は緩やかである。一日の流れは、まず自主活動を行う。内容として、スポーツなどの体験的な学習、草花や野菜の栽培、トランプなどのカードゲーム、読書や工作などである。その後、午前中に約 1 時間学習の時間がある。それぞれが自分の好きな教科や苦手な教科の学習を行う。教科書の復習を中心に、ドリルやワークを行っていた。12時からの 1 時間は、昼食の時間である。時には適応指導教室の畑で取れた野菜も出された。定期的に皆で調理を行う時間も用意され、カレーライスなどを作ることもあった。午後 1 時から個人個人で学習し、自分の学習課題が終了後、自主活動となる。

- 一人一人の主体性を尊重しており、指導員が、何をやりたいか聞いたり提案したりしていた。仲間に入りづらそうな子どもについてはちょっとした言葉かけをしていて、様子を聞いたり、仲間に入りやすい雰囲気をつくったりしていた。
- 自主活動では、個々の決定の場を多く与えていた。各自に好きなことをやらせて、できたことに対してそれをできるだけほめるようにして、自信をつけさせていた。
- 学習活動では、学習に対して不安を感じている子どもが多い。高校受験を控えた子どももあり、学力をつけることが、再登校への不安を少しでも和らげるものと思われる。個々の生徒は自分にあった学習目標を設定し、課題をこなしていた。指導員は丁寧に個別に支援していた。
- 指導員の温かい子どもへのかかわりがあった。声かけや、眼差しにそれが現れていた。また、それぞれが子どもの状況や、課題点を把握してアセスメントを行い、支援を行う。一日の活動の振り返りのなかで指導員同士の情報交換や連携が図られ、次の適切な支援に生かしていた。このような円環的な対応を繰り返し行っていた。
- 適応指導教室は学校と家庭の橋渡し役となる。活動でも、自主活動など本人の意志が許された家庭的な面と、学習や清掃活動などの学校的な面が存在していた。
- 朝や帰りの時は、指導員や職員が子どもや親に対してあいさつをしていた。親との関係が良好であることが伺えた。親の悩みや子どもの家での様子なども指導員に打ち明けていた。
- 一日が終わると毎日日誌をつけていた。その中で様々な子どもの様子が語られ、それにカウンセラーやその他の職員も加わる姿があった。気軽に情報交換ができる雰囲気があった。
- 職員会議や、ケース会議を定期的に行い、情報を交換しながら、指導員とカウンセラーが連携して支援していた。教育相談では、子どもと親に担当が一人ずつつき、連携していた。
- 様々な活動を通して、子どもが適応指導教室に入ってから段階的な成長が見られた。

（図 2）



心を開く時期

温かい指導員と一緒に活動しながら徐々に心を開いてくる時期である。指導員は子どもとのふれあいを大切に活動を行っていた。また、通室日や通室時間を本人が自己決定できるように支援していた。本人が嫌がる活動は無理をさせないで、子どもに選択させていた。指導員との温かなふれあいを通して、少しずつ自分を出せたり、笑顔が出てきたりして、自分の居場所を見つけ、徐々に自分の生活のリズムに戻り始める時期である。

活動し始める時期

毎日の活動の中でも自分から動こうとする場面が増える。友達同士のヨコの関係も充実してくる。指導員は子ども同士が友達と多くふれあうことができるように支援していた。また、できたことを認め、本人の成長をほめる場面を多くつくっていた。子どもは自分で決めた時間に行動できるように意識し始めるようになってくる。ゲームや学習に積極的に参加し、体験が積み重ねられ、友達同士の人間関係も広がってくる。

自信がついてくる時期

生活リズムも安定し、相談員のかかわりがなくても自ら活動ができることが少しずつ増えてくる。それが自信へとつながるようになる。また、集団で活動するときにはルールに従うことの必要性に気づかせ、他の人のことを考えられるように指導していた。その結果、自分の考えや気持ちや意志を無理なく相手に言えるようになってくる。

挑戦し始める時期

指導員は子どもに対して、自分の生活について計画を立てさせ、持続できるように励ましていた。計画的に行動できるようにしていき、予定や時間を意識して生活できるように支援していた。子どもは積極さが出てきて、今度はさらに新しいことや、少し難しいことにも挑戦し始めるようになる。「チャレンジ週間で学校に行ってみる。」「進路のことを考えてみる。」というような努力をするようになる。このように自分の進路や夢について前向きに考えるようになってくる一方、登校に際して、激しい緊張と疲労が見られる場合もあった。

自立していく時期

子どもは就きたい職業や進みたい学校を意識するようになり、ゆとりと落ち着きのある生活ができるようになってくる。進路については、具体的な情報を与え支援していた。子どもの様子は毎日の生活の中でも次第に余裕が感じられるようになる。将来の目標を定めて自分なりに努力し始める。学習についても塾に通ったり、自分で努力を始める子どももいた。また、学校へ特定の時間に登校したり、行事へ参加したりする姿も見られた。さらに自信を深めると安定した登校へとつながると思われる。

図2 適応指導教室で見た成長の過程

(2) チャレンジ週間から

チャレンジ週間が各学期の最初と最後の2週間設定されている。短期間の学校登校により、学校との結びつきを強くし、意識を高めるねらいで行われている。学校の相談室に登校したり、職員室に行ったり、1時間授業に出たり、給食を食べてきたりと、子どもの状態により様々であるが、自分自身で決定して取り組む姿が見られた。

- 子どもたちが学校のどこにどの程度なら行けるのか、誰のところへ行きやすいのか、どの時間に行くのかということなどを指導員と相談して、事前に学校と情報交換をしていた。

このように適応指導教室と学校が連携して子どもを支援する姿が見られた。チャレンジ週間をきっかけに、子どもも職員も学校との結びつきが一層高まると思われる。

- チャレンジ期間を乗り越えた時、皆うれしそうな生き生きした表情が見られた。そのことが自信や自己肯定感の高まりや満足感につながると思われる。
- チャレンジ週間に、学校へ登校することはできた。しかし、それがすぐに学校復帰には、つながらない。適応指導教室から学校へのハードルの高さを感じた。

(3) 宿泊体験学習から

10月26・27日と1泊2日で実施した。そのなかでゲームやバレーボールなどの室内レクリエーション、ハイキング、飯ごう炊飯、キャンドルサービス、描画、粘土工作等を行った。事前の準備で相談員と子どもたちでしおりを作ったり、食事のメニューを作ったりしていた。司会やゲームの担当者を決めて、役割分担を行っていた。宿泊に対して不安な子どもも多く、泊まらずに帰る子どももいた。

- 指導員は事前に子どもたちと一緒に活動内容を考えた。活動を通して達成感を味わせ、自己肯定感や自尊感情を高め、自信をつけさせていた。
- スタッフ会議で事前に職員間で情報交換をし、一人一人の個性や、課題を明らかにして、働きかけを行っていた。また、一日の振り返りも行い、次の支援に生かしていた。スタッフは連携して子どもとかわかっていた。
- 適応指導教室から離れ、普段とは違った活動の中で、人間関係の深まりや広がりにつながっている。
- 2日間の活動を終え、皆笑顔で帰って行った。普段あまり気持ちを出さない子どもも感想文に積極的に気持ちを表していた。

(4) 家庭・学校との連携

担任、養護教諭、学校カウンセラー等との共通理解や連携

6月と2月に不登校及び不登校傾向児童生徒が在籍する学級担任者会議を開き、情報交換及び児童生徒理解を図っていた。また、必要に応じて学校訪問や電話連絡を行い、学校行事の参加や部分登校を働きかけた。

家庭との連携

年3回（7月、9月、2月）保護者会を開き、共通理解を図るとともに、保護者相互のかかわりを深めていた。必要に応じて個別面談や家庭訪問、電話等で相談を行った。また、不登校に関する講演会を開催して不登校及び不登校傾向児童生徒の理解と対応について意識化を図った。

- 学校への毎月の報告書、担任との情報交換等、学校との連携を密にすることにより、児童生徒の多面的理解、かかわり方について適応指導教室と学校との共通理解が図れている。
- しかし、その一方で学校は学校、適応指導教室は適応指導教室という一面も一部にある。お互いに情報連携や行動連携が求められる。
- 担任や養護教諭と具体的な情報交換ができ、相談室登校、保健室登校へのきっかけをつくることができた。
- 保護者の不満や不安を聞いて相談にのる姿が見られた。
- 学校と家庭の間に入って、保護者のニーズを学校へ伝える橋渡しの役割も果たした。
- 適応指導教室への入室にあたり、保護者のニーズを聞く機会があった。「学校復帰となれば一番良いが、それがかなわなければ適応指導教室へ毎日行ってもらえたら。」と適応指導教室に寄せる期待は非常に大きい。

伊勢崎市適応指導教室からの学び

早期発見・早期対応の重要性

子どもの心に寄り添った、きめ細かく柔軟な支援の大切さ

多面的で、的確なアセスメントの必要性

子どもの自尊心・自信を高める支援の重要性

評価に重点を置く円環的な支援の有効性

チームによる支援の有効性

目標・方針をもった段階的な支援の大切さ

学校・家庭・適応指導教室の連携（連携ネットワーク）の必要性

情報が流れる機能する組織の重要性

コーディネーターの大切さ

1 早期発見・早期対応

適応指導教室のスタッフの熱心で親身な支援によって、多くの子どもが、元気になり活動のエネルギーも出てきている。しかし、長期の不登校児がほとんどで、なかなか学校には足が向かないのが現状である。適応指導教室でも、不登校の期間が長期になればなるほど、学校復帰も難しくなるととらえている。長く不登校が続くと、不登校を持続させる別の状況が生まれてくる。それゆえに、不登校問題は、長期化・深刻化させずに、できるだけ早い時期に発見し、早い時期から適切な支援ができるよう努めなければならない。つまり、不登校問題解決に向けて、早期発見・早期対応が最も大切なことのひとつと考える。（図3）

2 子ども心に寄り添った、きめ細かく柔軟な支援

適応指導教室のスタッフは、子どもとふれあう時間を多く取り、相互にコミュニケーションを図る機会をつくらうと

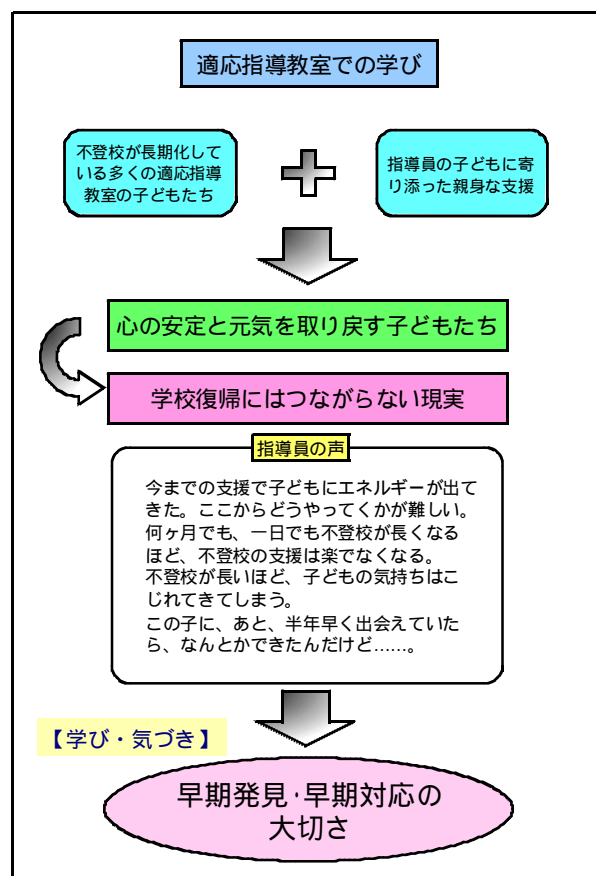


図3 フィールドでの学び
早期発見・早期対応の大切さ

努力していた。このことで、日々変化する子どもの心や状態を理解でき、きめ細かく柔軟に支援することが可能になっていた。子どもの側もスタッフへの信頼感・安心感が増し、適応指導教室が落ち着いて生活することのできる心の居場所となっていた。

3 多面的で、的確なアセスメント

適応指導教室では、個別のプログラムを考えて支援しようとしている。スタッフが単独でアセスメントするのは簡単ではなく、コーディネーター役のスタッフ等からのコンサルテーションや学びを生かしてアセスメントしているのが特長であった。アセスメントシート（図4）や支援シート（個人記録ファイル）なども活用し、情報を集約しながら、スタッフ会議（支援チーム会議）等を通して、具体的にどのような内容の支援が必要なのか、ということ等について、多面的で、的確な判断をしていきたい。

アセスメントシート			
児童生徒名	男・女	学年	組
生年月日	年	月	日
担 任			
本人の状況 (情報)	欠席・遅刻・早退の状況		
	日常生活 (含む健康)		
	情 緒		
	自主性・意欲		
	社会性・ 適応能力		
	友人関係		
	学習・学力		
	進路・夢		
	趣味・特技		
	気になる言動 (サイン)		
家庭環境・生育			
そ の 他			
理 解 と 課 題			
具体的な支援策 (方針・目標に沿って、 具体的に、「誰が、誰 に、何を、いつ」支援 するかについて)			

図4 アセスメントシート例

* アセスメントシート例の詳細と支援シート（個人記録ファイル）例は、資料編(P 554～555)に掲載。

4 子どもの自尊感情・自信を高める支援

適応指導教室の子どもは、心も安定し、自立に向けてのエネルギーが出てきているが、それには、スタッフが日々の活動、行事などを通して、認めたり賞賛したりすることで、自尊感情・自信を高めていこうとする支援を行っていることが大きい。劣等感や不安を抱えることの多い不登校児が回復したり変容したりするためには、自尊感情・自信を高める支援が重要である。

5 評価に重点を置く円環的な支援

フィールドワーク中に、子どもの成長・変容に有効に働いている支援を数多く見ることができた。特に、【子どもとのふれあいと情報収集による実態把握→他のスタッフからの学びを取り入れながらの子ども理解・アセスメント→子どもの課題を把握し、自己課題に置き換えた上での支援計画（支援方針・支援策）の決定→支援の実践→評価・検討】のサイクルを円環的に繰り返す支援が効果的であった。そのサイクルの中に、スタッフの支援に向けた学びやトレーニングも取り入れていた。子どもへの支援を評価・検討して、子どもの新たな課題や変容を見取った上で、計画を見直したり、修正したりしながら、継続的に支援していくことが大切だと思われる。学校でも、従来行われてきた直線的で単発的な支援から脱却して、評価を繰り返しながら円環的に支援を行うシステムと方法への転換が求められていると考える。

6 チームによる支援

適応指導教室では、各指導員の特徴（若いベテランか、専門教科は何か、得意分野は何かなど）を生かして、チームで支援にあたっている。さらに、定期的に評価を取り入れて円環的な支援を展開している。（図5）

この様子から、不登校児に対して、支援者側は個々の資源を活用しながら、チームで支援していくことが有効であることを確認できた。不登校対策において、どうしたらチームで支援していけるか、どのようにチームで支援していくか、ということも重要になる。

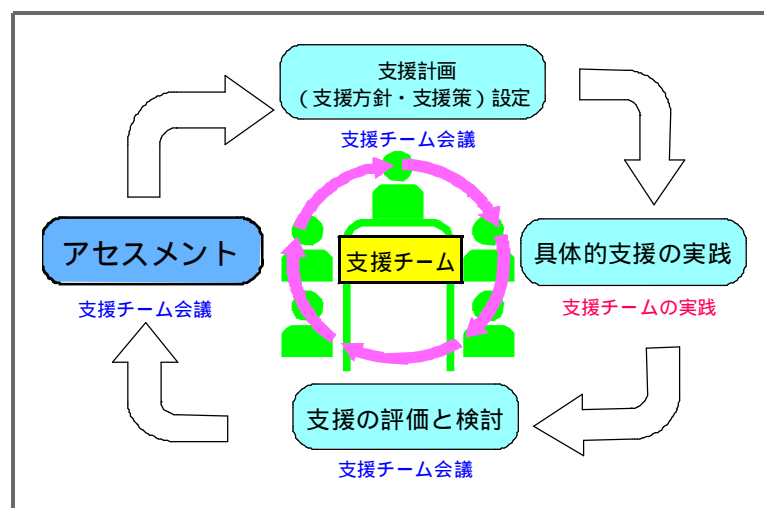


図5 チームによる支援の円環的プロセス

7 目標・方針をもった段階的な支援（スモールステップでとらえる支援）

適応指導教室では、教室での支援をどう学校復帰に結びつけていけばよいのかなど、具体的な方策・考えをもてない場合もある。長期化している不登校児がほとんどなだけに、アセスメントしたことに基づいて、個々に目標・方針を立てて、段階的に支援していくことが大切である。学校復帰に向けた到達目標を、不登校児の状況や変容に応じ、思いや願いを生かして、スモールステップで設定する。その実践で成功体験を味わわせ、それを賞賛・承認することで自

尊感情を高めながら、支援していくことが重要である。(図6)

8 学校、家庭、適応指導教室の連携(連携ネットワーク)

適応指導教室は、定期的な保護者カウンセリングや両親の送り迎えの時の会話などで、親のニーズを知ったり、適応指導教室の様子を伝えたりして、家庭との連携を図ってきた。そこから家庭の信頼を得ることができ、本人が安心して通室することにもつながっている。

一方、適応指導教室と担任との連絡会に参加して感じたのは、情報交換は行われているが、子どもの支援のための行動連携に向けた話し合いまで至らないことがあったということである。子どもが適応指導教室に通って安心している学校と、心の安定が図られ活動のエネルギーが出てきた子どもを学校復帰に向けていきたい適応指導教室側の間に、連携についての温度差があると感じた。この温度差を緩和

し、子どもを学校復帰へ導くためにも、二者の連携を強める必要がある。不登校児の学校復帰には、学校と家庭と適応指導教室が不登校問題を共有課題ととらえ、情報と人がネットワークでつながる連携ネットワーク化が重要である。

9 情報が流れる機能する組織

適応指導教室のスタッフ間では、子どもとふれあうことで得た情報が日常の会話の中で流れている。スタッフ会議などでも、子どもの情報交換は活発になされている。このことで、子どもとスタッフ間の理解も深まっている。チームとして協力しながら、お互いの役割をわきまえて、効果的に子どもにかかわっている。情報が流れることによって、支援に役立つ情報交換(情報連携)や人間関係づくりを行い、さらに行動連携に結びつくような組織づくりが重要である。

10 コーディネーター

適応指導教室には、コーディネーターとして適任と思われるスタッフが配置されていた。コーディネーターは、支援する子どもや家庭をよく知ったうえで、支援チーム会議を開催し、支援策を計画する中心的役割を担う。子ども理解・アセスメントや支援策については、他のスタッフにアドバイスしたりすることもある。コーディネーターは、不登校についての見識、教育相談に関する知識・技能をもち、話し合いを進める能力・チームづくりをする能力を有し、豊

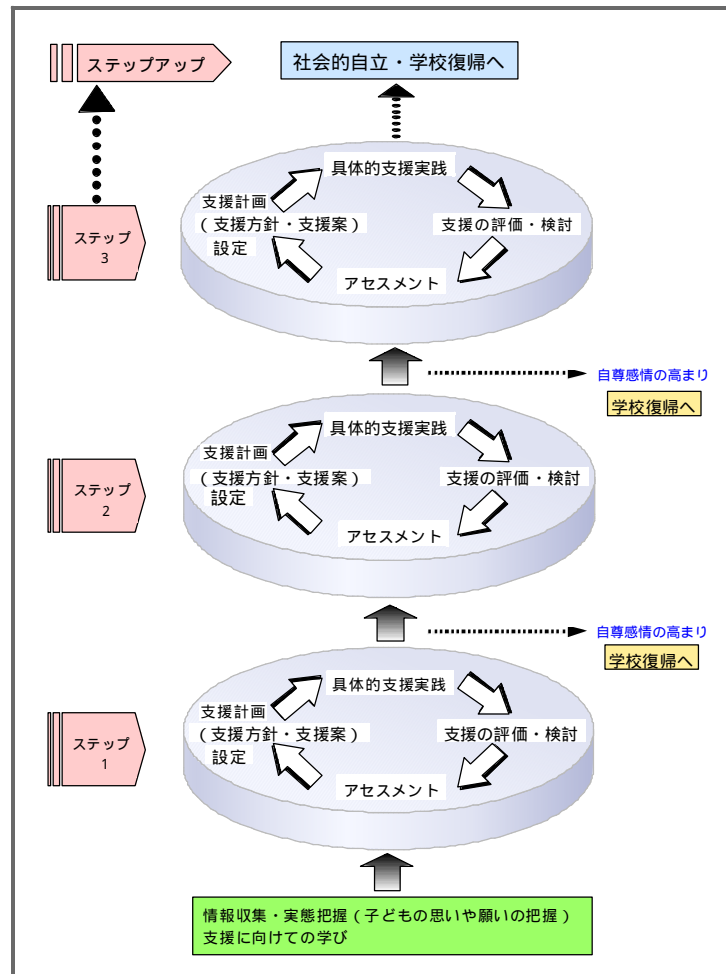


図6 スモールステップでとらえる支援

かな人間性と厚い信頼、リーダーシップのある人材が望まれる。コーディネーターとは、広く情報を流し、人をつなぎ、情報が流れる機能するシステムをつくる存在であると言える。

桐生市適応指導教室からの学び

桐生市適応指導教室からの学び

問題解決の円環的プロセス

子どもを背景から理解する適切なアセスメント

子どもの有効な資源（リソース）を生かしニーズに沿った支援

早期発見・早期対応の重要性

子どもが自己決定することで、自己肯定感を高める支援

適切な登校刺激の必要性

段階的な人・時・場での支援

不登校の経過と状態に応じた支援の重要性

チームによる支援の有効性

ネットワーク思考の重要性

1 問題解決の円環的プロセス

参加観察を通じて様々な支援が行われていることに気が付いた。適応指導教室での指導員は子どもたちに温かく寄り添いながら学校復帰へ向けた支援を行っていた。「実践したが効果が出なかった。」で終わる直線的で単発的な実践では、効果が上がらない。一人一人が単独のアセスメントだけでなく、子どもたちの情報を集めて、状態を把握し、職員や学校とその情報を共有し連携していた。それに基づいて支援計画を立て、実践してみて、子どもの変容を見取り、それを評価・検討した上で、課題を見直したり修正したりしながら、チームで実践し、円環的に支援していくことが大切である。このような円環的な問題解決システムへの転換が必要である。（図7）

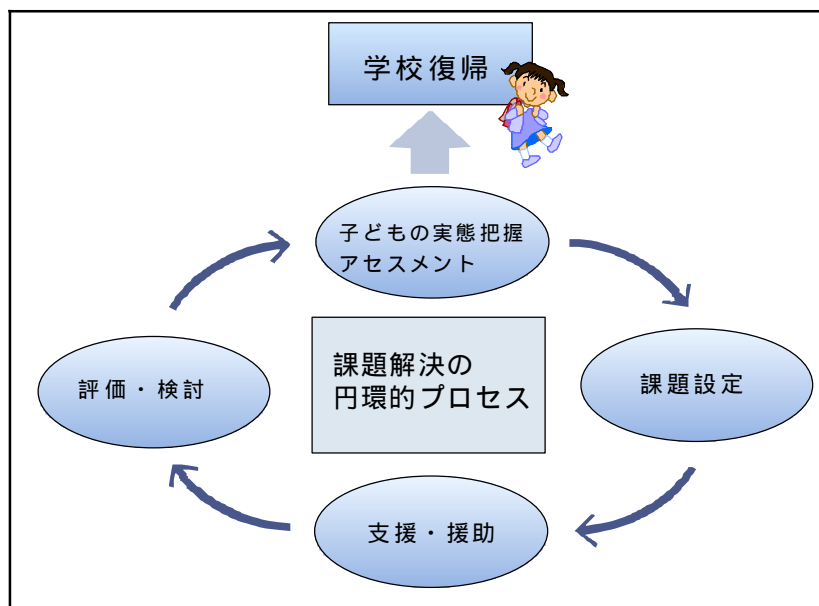


図7 問題解決の円環的プロセス

2 子どもを背景から理解する適切なアセスメント

子どもを背景から理解することは支援上欠かせないものである。登校を阻んでいる背景を見極め、それぞれの子どもに適した支援を行うことが求められる。不登校の子どもたちを理解するために、様々な情報の収集が必要である。そして知り得た情報を多くの支援者で共有することにより、支援の一貫性や共通理解が図られ、組織的なチーム支援に生きると思われる。その子が「なぜそのような行動をとったのか。なぜできないのか。なぜ学校に来られないのか。」と子どもを取り巻く環境など幅広く背景から理解することが非常に大切である。個人的要因、不登校の直接のきっかけや長期化している要因、子どもとつながりやすい人、その子のもっている有効な資源（リソース）を見つけ出し、支援に活用することが必要である。プラスの情報がその後の支援に大きく影響を与える。

次に、適応指導教室で見たアセスメント例を示す。（資料１）

資料１ 適応指導教室で見るアセスメント例

『なぜあの子はバレーボールを皆と一緒にやらないのだろう。』
バレーボールのルールをよく知らないのか。（知識の面）
以前、試合でミスをして皆から責められたのか。（気持ちの面）
バレーボールに興味・関心がないのか。（好き嫌いの面）
バレーボールが下手なのか。（能力の面）
なぜその子がそのような行動をとってしまうのだろうか、というような背景から理解した情報が得られると、その後の支援が変わってくる。

3 子どもの有効な資源（リソース）を生かしニーズに沿った支援

アセスメントをもとに、子どもたちの状況やニーズを把握して、課題を設定する。子どもたちの自己決定を支援しながら目標を立てる。その目標は「毎日通室する。」「不得意な英語を毎日予習する。」など自己決定での目標であった。子どもたちの変容を見極めながら無理なくその子の状態に応じて、段階的にスモールステップで目標を設定することで、子どもは体験を積み重ね、人間関係を広げ、自己肯定感や自信を深めていく。また、子どもの変容を見極めるためには、子どもとできるだけ多くかわり、行動を共にする必要がある。

支援においては、その子どもの周りにある有効な資源（リソース）を活用することが必要である。例えば、その子の内的な資源（長所や特技）や周囲の人的・組織的・環境的な資源などを有効に機能させ、多くの有益な情報やつながりをもった家庭の親兄弟や学校の教師・友人などと学校復帰に向けて支援チームを組むことが必要である。そのために担任者会議や、保護者会議などを開催し、ニーズが把握できるように努めていた。

4 早期発見・早期対応

適応指導教室では様々な活動の中で、指導員が温かく子どもとかかわっている。活動も広がり、挑戦や、自立の気持ちも育ってくる。しかし、チャレンジ登校という形で学校へ行くことはできるが、完全な学校復帰は難しい現状がある。

適応指導教室の話として、「不登校が継続すれば、不登校の原因とは別の二次的な要素も出てくる。そのことで長期化してしまう。できることなら不登校児を出す前に早期発見して対応することが一番だ。」ということがあった。また、不登校が長引くと、本人や家族が社会から孤立する傾向も見られる。そのため、何らかの働きかけが必要な時期に、家族以外から支援が受けられない場合もある。家族の負担が大きく、家族が暗黙のうちに認めてしまい、状況が固

定化してしまうことがある。そのようなことから、不登校児に対して、早い時期にその前兆となるサインを発見し、長期化・深刻化する前に支援することが、不登校問題の解決のなかで最も大切なことのひとつではないかと思われる。

5 子どもが自己決定することで、自己肯定感を高める支援

適応指導教室では一日の活動や行事の中で、それぞれ子どもたちのニーズをくみ取りながら活動内容が決められていた。子どもたちはまず自分のやりたいことや目標を自分のペースで自己決定する。本人の気持ちで決定したことだから、自分の気持ちが周りの人に対して現れることになる。自分のやりたい気持ちを他人に理解して分かってもらうということは、自信や心地よさにもつながる。また、やりたいことやできることを自分で決定した方が、より実行に移しやすいと言える。つまり、自己決定をすることによって、自分の気持ちと向き合い、「自分」という存在を再認識することができるのである。そして、その活動を達成したことで、認められたりほめられたりすると、存在感や自己肯定感を感じることになる。普段不安や劣等感を感じる人が多い不登校児にとって自己決定の場面を増やすことは大切である。

6 適切な登校刺激

「学校へ行きなさい。」などの言葉かけだけでなく、学校の話や友人の話など学校に関する情報全てが登校刺激となりうる。登校刺激は子どもの様子をよく観察し考えながら与える必要がある。登校刺激は不登校の子どもの気持ちを理解し、子どもが何を求め、どうしたいのかを考えながら与えなければ、一方的なものとなってしまう。相互コミュニケーションを意識しながら不登校児への適切なかわり方を考える必要がある。

登校刺激を考える場合、不登校児が学校とつながりやすいところで、自己決定ができるようなものでなければならない。適応指導教室における活動では、チャレンジ週間などを設定し、不登校児と学校をつなぐ機会を見つけながら、無理のない登校刺激を与えていた。登校刺激は、子どもとの信頼関係を確立して目の前の子どもに合ったものである必要がある。また、登校刺激を与えときのポイントとしては、与えてみて子どもの拒否反応が見られれば別の方法を考えることが重要になる。子どもを背景からしっかり理解した上で、登校刺激を与える時期と与える材料をよく選定して適切な登校刺激を与えることが大切である。(図9)

本適応指導教室は進路選択を間近に控えて、それに興味・関心を示しながらも大きな不安を抱えている子どもも多かった。進路に関心を示す前向きな姿勢が見えたとき、進路支援も適切な登校刺激になると思われる。学校とのつながりも図られ、意識できるよい機会だと思われる。登校刺激の一例を資料2に示す。

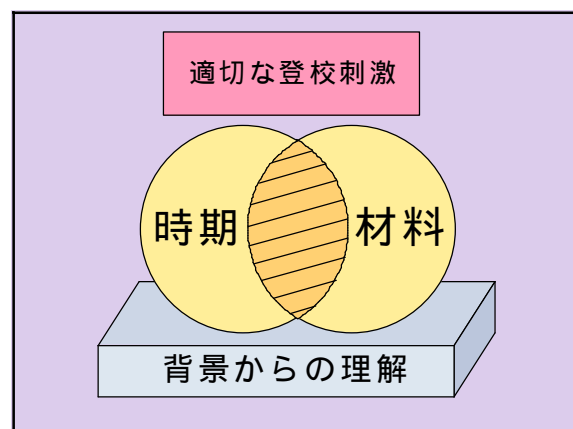


図9 適切な登校刺激

不安を取り除き、希望をもたせる。

- ・学校と連携を取り、担任や学年主任や学校長などから受験できることをきちんと伝えてもらう。
- ・「やればできるよ。」と自信をもたせるような支援を行う。
- ・現状に合わない希望をもっている場合でもすぐに否定しないで、なぜそのような希望をもっているのか、よく話を聴く。
- ・本人の適性などを考え、自己実現できるような支援を一緒に考える。

進路の情報を伝える。

- ・普通に学校に登校できている他の生徒と同じように、進路資料、進路説明会の通知、学校見学会の予定などの進路情報は常に伝えてもらえるように学校の担任などと連携を図る。
- ・子どもに進路に対する意識をもってもらうために進路希望調査などに記入してもらう。
- ・三者面談などの連絡をする。
- ・本人なりに進路に関する予定やスケジュールを立ててみる。

学習などの受験の準備を支援する。

- ・学習は本人のできるところから本人のペースで行う。
- ・学校や家庭との連携を図る。

また、不登校の経過と状態で、登校刺激を積極的に与えることが有効に働く時と、手控えなければならない場合がある。適応指導教室の指導員は状況を考えながら登校刺激を子どもたちに与えていた。

エネルギーが充電され、登校刺激を与えてよい場合

朝、体調不良を訴えることがほとんどなくなった。
生活のリズムがしっかりしてきた。(起床・食事等)
家庭訪問や電話で、学校のことや勉強のことを気軽に話すようになってきた。
家族と普通に会話をすることができる。
友達や先生の訪問を受け入れられる。
親や友達と外出できるようになる。

登校刺激は控えた方がよいと考えられる場合

生活のリズムが乱れ、昼夜逆転をしている。
朝、頭痛・腹痛を訴える。
朝、不機嫌な態度や不安な態度がうかがえる。
学校的话题を避ける。
家庭訪問で教師や友達が訪ねても会おうとしない。
自室にこもりがちで家族との接触を避ける。

7 段階的な人・時・場での支援

不登校児と学校のつながりを促進するために、登校刺激や部分登校などの支援では、人・時・場に整理して適切な支援を行う。学校の何とつながりやすいか、何であれば抵抗なくつながることができるのかは一人一人違う。段階的支援として、不登校児が自己決定で決めて、つながりやすい所から始める。そして、そのつながりを広げていく支援を行い、無理なく再登校を進める。人・時・場に整理することで、不登校児と学校のつながりの状況を把握することができる。また、解決すべき課題が見えて、具体的な次の手だてや登校刺激が検討できる。

(図8)

8 不登校の経過と状態に応じた支援

適応指導教室の指導員はそれぞれの子どもに対してその子の状態に合った支援を行っていた。子どもの状態も、学校システムに耐えうる子どももいれば、集団になじめず、別室の支援が精一杯の子どももいる。

今子どもがどのような気持ちでいるか、どのようなエネルギーの充足の状態にあるのかなども考えながら支援を行うことにより、その支援がより有効になると思われる。学校においても、不登校児を支援するにあたり、担任等は不登校児がたどる一般的な経過や状態を理解し、その流れに照らし合わせて、状況判断をしながら、その時々にはふさわしい対応を考え、支援をすることは非常に大切であると思われる。一般的に経過は良くなったり悪くなったり揺れ動きながら徐々に上がっていくものである。このような一般的な経過を評価のものさしにすることができる。

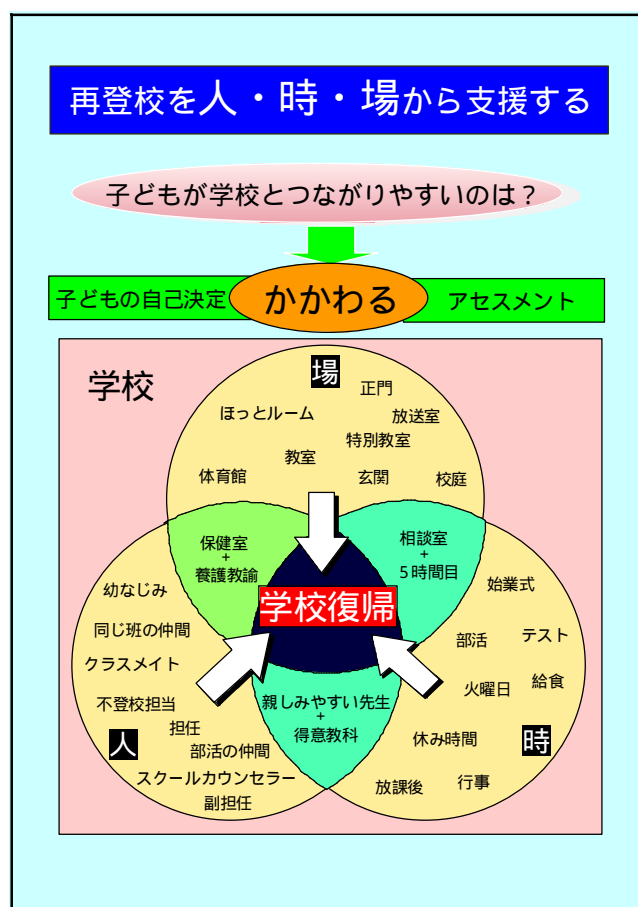


図8 人・時・場での支援 (奥山 2004作成)

前兆期

学校生活や家庭生活のなかで不適応を起こし、日常生活を送るのが苦しくなり始めている。やや元気がなく、教室でぼつんと一人であることがあるが、まだ欠席や遅刻など顕著な行動は見られない。

進行前期

頭痛や腹痛などの身体症状が見られる。欠席することを親が認めると安心し、そのまま寝ていたりテレビを見たりして、日中をのんびり過ごす。休みが決まると元気を回復しその日は元気に過ごす。次の日の朝が来ると不安な表情で再び調子が悪くなる。

進行中期

登校することに対してすくみ反応を示すようになり、連続欠席が始まる。級友や担任が訪問しても、部屋に入ったまま会おうとしない。また、攻撃的な面も見られ、物や人に当たるなどの行動をとる場合もある。

進行後期

無気力な生活に陥る。しかし、精神的に安定して、学校のことを言わなければ穏やかに暮らせるようになる。この時期は好きなことに没頭させて、「元気になるようにエネルギーを貯めさせること」が必要である。

回復期

日常生活の立て直しを始める時期である。生活も規則正しくなり、活動性が高まる。「子どもが自ら学校へ出かけようとする力」「親が子どもを学校へ押し出す力」「学校が子どもを引っ張る力」がうまくかみ合うと再登校につながる。

* 各経過毎のチェックシートと支援策については、資料編(P 557～561)に掲載した。

9 チームによる支援

個人の支援では限界がある。不登校の解決に向けて、適応指導教室では指導員を中心に学校の担任、保護者、スクールカウンセラー、養護教諭など多くの人がチームとなり、子どもの学校復帰や社会的自立に向けて支援を行っていた。定期的に情報交換や個別支援の状況把握を行い、効果的な支援が展開されていた。同様に学校、適応指導教室、家庭等がチームを組織することが必要である。計画的に会議をもちながら、情報を共有して、それぞれの特性を生かして支援を図ることが大切である。そのためにはチームの中にコーディネーターを作り、円滑な情報連携が実現できる組織が必要である。

10 ネットワーク思考

不登校児を支援する人が子どもを見取り、得た情報を周囲の人間と共有することが大切である。学校や適応指導教室、家庭、関連機関はそれぞれの観点で情報をもっている。その情報が独立しているのでは、背景からの多面的な理解につながらない。不登校の問題を効果的に解決するために、お互いの情報をつなぐネットワーク思考が必要である。これにより、共有された多くの情報の中から、子どもの状態に即した支援に役立つ情報が得られるのである。

二つの適応指導教室（フィールド）の学びから見えてきたもの

本研究は質的研究の一つとしてフィールドワークを行い、研究課題である不登校対策支援プログラム作成を目指した。

伊勢崎市指導教室と桐生市適応指導教室のフィールドの学びから以下のものが見えてきた。
(図9)

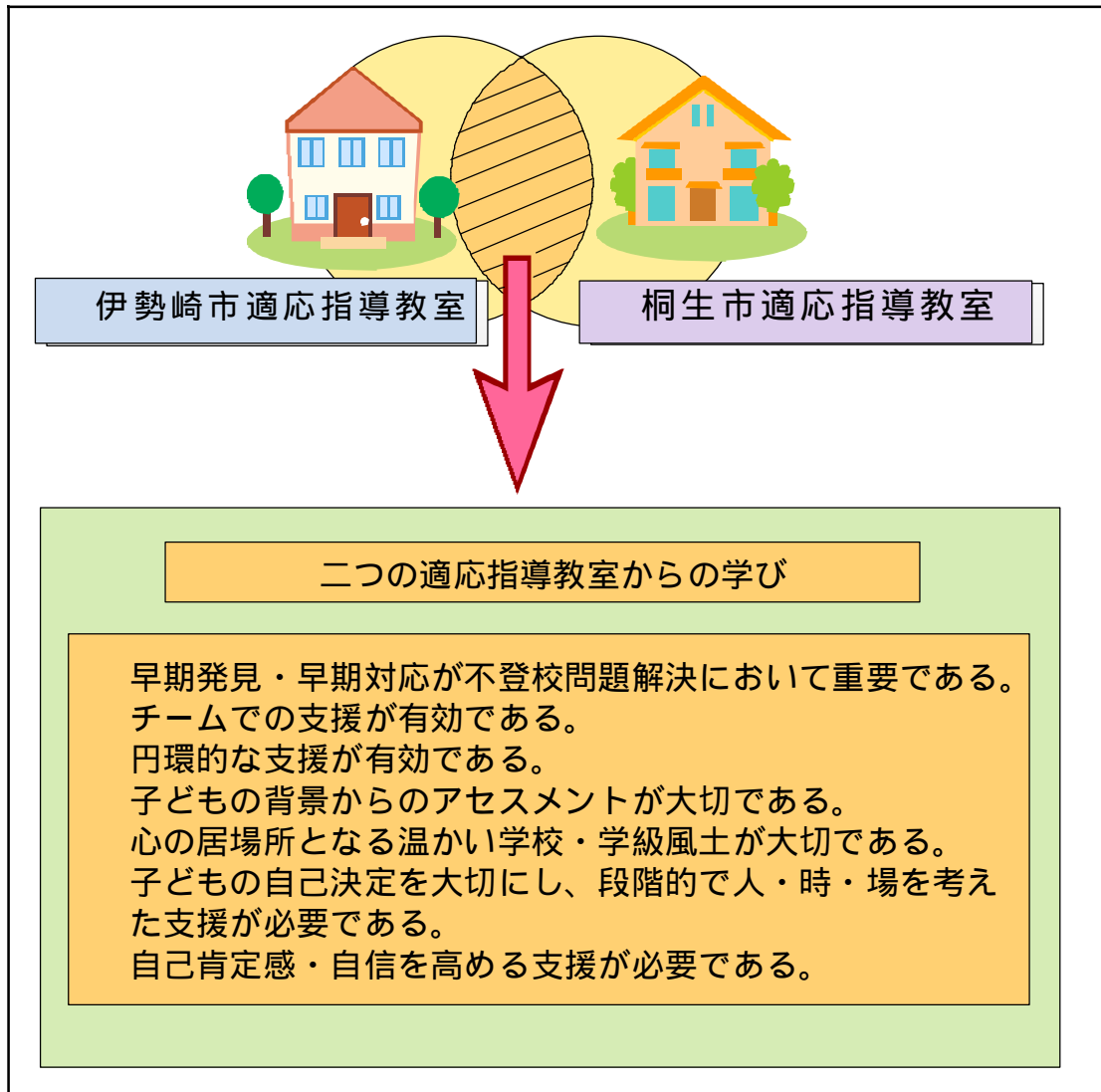


図9 二つの適応指導教室からの学び